

吉川英治歴史時代文庫 54



新平家物語(八)

吉川英治^{歴史}時代文庫 54

新・平家物語(八)



一九八九年七月十一日第一刷発行
一九九三年一月十二日第七刷発行

著者——吉川英治

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二二—二一

郵便番号一—二—〇一

電話 編集部 〇三—五三九五—三五〇五

販売部 〇三—五三九五—三六二六

製作部 〇三—五三九五—三六一五

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送り
ください。送料小社負担にてお取り替えます。
定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan ISBN4-06-196554-9

©吉川文子一九八九(文2)

江苏工业学院图书馆

平家书藏

英治
時代
歴史
文庫

54

物語

(八)

かまくら殿の巻（つづき）

7

三界の巻

168

略系図

420

註解

424

欺されたねえ 平岩弓枝

426

新・平家物語の旅Ⅷ 尾崎秀樹

428

新・平家物語
(八)

かまくら殿の巻（つづき）

水鳥記

十月二十日の夜。雨を思わせる風が、冬にも似ず、生あたたかい。

富士川口の海上も、上流の山岳地方も、いったいに雲が多かった。

薄雲をとおして、二十日ごろの月が、兩岸の蘆荻ろてきを、夢のように見せ、夢のように暗くした。

それは、主流だけでなく、大小無数な沼とも続いているように望まれる。所々の樹林、畑、なわて、遠望しただけでは、どこが敵の陣地やら分からない。それでも敵がいるのかとさえ疑われてくる。

うら悲しくなるほど静かである。

三保のあたりで千鳥が啼なく。

また、え知れぬ水音がどこかで立つ。何かに驚いた水鳥にちがいない。

「しゃつ、平家め、こなたよりのお使いを、斬ったと告げて来たぞ。今、かような*やぶみ矢文

を」

水辺に屈みこんでいた一隊の内から、ひとりの部将が、敵からの矢文を拾って読み、加島の中軍へ馳けこんで来た。

きのう、頼朝はここまで、馬をすすめ、今夕にいたるまで、川をはさんで対峙していたが、夜にはいって、敵の大將権少将維盛へあて、「夜明けとともに矢合わせ申さん」と、使者を送っていたのである。

ところが今、上総守藤原忠清の名で返して来た矢文によると、使者の首を刎ね、これをもって、乱賊追討の血まつりにするとあった。もとより文辞は不遜を極めている。

「あわれや忠清、今すぐ、眼を醒ましてくれようぞ」

頼朝はののしった。

決戦状は、一計にすぎないのだ。かれの待つある戦機は、明朝ではない、夜明け前にある。

「……が、さすがは維盛、忠度。戦は心得ておる。もし頼朝がここまで、何も覚らずに馬を進めていたら、伊豆からは伊東祐親に襲われ、相模路からは大庭一族に脅かされ、甲斐境よりは長田忠致父子に忍び寄られ、討死のほかなかったろうに」

自己に誇らず、敵方に立って、敵の抱いていた戦略を分析してみると、頼朝は今さらのように、慄然とせずにはいられない。

およそはと、直感の下に、先を取った果敢が、図に中たったのであった。

「——とも知らぬ忠清よ。さすが維盛も忠度も、自身の施した計略が、逆になって現われようとは、覚るまい」

渡り鳥が、また、雲間を縫ってゆく。

陣地は、半里にもわたっているが、一火の光もなく、馬も人も、眠っているように、寂としていた。

「殿。……他の方々にも、ここへ出て御覧じあらぬか」

陣幕の外から、岡崎義実が、さし招いた。

何かと、人びとはかれについて、幕営の外へ出て行った。眼にはいる物もない。渺として、薄明の大河と雨気をふくんだ月色があるだけだった。

「なんじゃ、義実殿のたばかりよな」

「いやいや、しばし、こうしておられい」

義実は、兜のしころを指先で上げ、耳を対岸の方へ向けて見せた。

——オオと、人びとも耳をそばだてた。

おりおりの微風に乗って、遠い水のかなたから、優雅な管絃の調べが聞こえてくる。諸将のうしろに佇んで、頼朝もはつきり聞いた。

「……はて、あの優雅なまねは、悠長さは？」

「いかに平家の公達とて」

諸將は怪しみあつた。坂東武者には解けない都人の心理なので、物の怪でも探るような疑心を抱いた。

が、頼朝はそれを、敵が、心の余裕を誇るものと聞いた。示威でさえあると思った。

「憎い敵かな」

そうつぶやいて、

「まだか、約束は」

と、催促するように諸將を見まわした。

そのとき、はるか上流の安居山のいただきに、星ほどな火が明滅した。それに応えるように、対岸遠くの富士見峠にも、チラと幾つもの火光がうごいた。

「あつ、見えまする」

「おうっ」と、頼朝もあたりの諸声とともに叫んで「——馬を」とどなった。

令の必要はない。令は事前に行き渡っている。

頼朝は、馬上に。諸將は、部署へ向かつて馳けなだれ、螺兵は貝を吹いた。

まっ黒に、人馬が渦巻く。しかし一律の下にある秩序を示し、それが整々たる陣形をなすとともに、長い岩壁が押し出されるように、河原の際まで、地鳴りをとどろかして馳け出した。

中軍だけではない。

富士川の約半里にわたる水際にそれが起こった。

それと、陣々の全線から三保の川口、海上にかけてまで、松明、漁火、かがり火、野火、あらゆる所に火焰がいぶり出した。これを平家側から望見したら、筑紫の不知火かとも疑われたにちがいない。

平家の陣中に聞こえていた管絃の音は、もちろん、この一瞬にかき消えた。——それに代るに、馬の狂奔と、いななきと、武者のわめきと、女の悲鳴などが、夜半のやみを、われからなお、暗澹なものにしていた。

すでに、そこへは、潜行した源氏勢の馬蹄が突入していたのである。——上流から奇襲に出た武田信義、一条忠頼、江馬四郎義時、佐々木定綱、盛綱などの一隊、二隊、三隊と駆けつづくのがそれだった。

また、べつな一軍は、甲斐境を大まわりして、富士見峠から庵原へ下り、平軍の後方を断とうとしたが、これは、間に合わなかった。

なぜならば、早くも平家の総軍は、総なだれとなり、怒濤の退くような速い逃げ足を見せていたからである。

「退くな、見ぐるしい」

「どの顔さげて、都へ帰るぞ」

維盛、忠度のみか、恥を知る公達輩は、声をからし、あぶみを踏んばり、幾度かは、死力を賭けて、踏みとどまろうと試みた。

「いや、ここはお退きあるが御分別です。殿軍しんがりは、それがしにお任せあつて」
伊勢武者、伊藤次郎景安の一手は、あとに残つて奮戦した。源氏の飯田太郎を討ち、さんざんに働いて、討死した。

源氏勢は、由比、薩埵さつた、清見潟を見ても、なお追撃をゆるめない。

武田信光、三浦義澄、和田義盛、土肥遠平など——後方から頼朝の伝令があり、「長追いすな、引つ返せ」と呼び止められても、耳もかさないほどだった。

平家勢はといえは。

一たんの逃げ足は、異様な恐怖心理も手伝つて、とどまる所もなく、夜が明けても、後ろに敵を見なくなつても、われがちに、海道を支離滅裂に逃げ急いでいた。

そして、都近くになるまでは、一日一夜も、かれらは、その恐怖から解かれることもなかった。

源氏武者に追われなくなつたと思えば、途々、いたる所の飢餓の群集に襲われ、飢民の虎口こゝろからのがれたと思うと、また源氏の船が海から兵を上げて、道を塞ふさいでいるなどと脅かされた。

維盛、忠度の両将が、疲れはてた駒を不破ノ関に佇ませたとき、前後に見た味方は、わずか五、六十名にも足らなかつた。

その中に、上総守忠清は見えない。

二人の胸には、その忠清の生死よりも、今となつては、あの老武者斎藤実盛の直言

が、ひしひし、思いだされていた。

これもりふ せんてんまつ
維盛不戦顛末

まだ都の内へは、なんの情報も伝わっていないうちのことである。

前右大将宗盛は、ふとそこへ取次いで来た形のごとき青侍を、穴のあくほどながめて、

「なんじゃ？ 実盛が立ち帰ってきたと。……なにを呆けたことをいうぞ。頼朝追討の軍について、東国へ下った斎藤実盛が、いまごろ、都におるわけはない、人違いである、問い直して参れ」

と、あたまから粗忽な取次ぎとしてしかりつけた。

青侍はしきりに小首をかしげながら引込んだが、まもなくまた、廊の間の端へかしこまって、おなじ取次ぎをくり返した。

「——やはり別当実盛どのに違いございません。にわかなことのあつて、駿河の清見瀉から、大将方にも断りなく、単騎、脱け陣して来られたのだと仰っしゃられます」

「なに、脱け陣して来たことや」

「そのせいか、よろい具足を召されたまま、いたくお疲れの容子で」

「はアて、実盛にちがいはなくば……これやただ事ではあるまい。すぐ通せ、早く通せ」

仰天とはこんなときのことであろう。宗盛は、まったく、びっくりした。

「——おお、実盛ではないか。ど、どうしたことぞ」

「まことに、面目もございませぬ」

「ま。そこでは話が遠い。もそつと近うはいつて来い」

「このような陣中姿、旅路の垢あか、余りにむき苦しゅうございますゆえ」

「かまわぬ。……いや、それどころかは」

と宗盛は、かれが近く寄るのを待って、

「たれよりは、よい分別者と信じて、これより維盛、ただのり忠度の扶たすけに添えてやったそなたが、無

断、征地を捨てて帰って来たとは、どうしたことじゃ。そも、何事かよ実盛」

と、ひざがしらのふるえを抑えていった。

死をも覚悟し、老いの疲れも励まして、ここまで持って帰った憂いを、また信じるところを、実盛は、ただちに訴えた。

「せっかく大軍をつかわされ、またお鑑めがねを給わって、不つつかな実盛まで、軍監の重任をかたじけのうして下りましたなれど、お味方の惨敗は、火を見るようなものでございましょう。残念ながら十に一つも勝てる見込みは立ちませぬ」

「まだ一戦を交まじえたとも聞かぬに」

「いや、合戦に及んでは、まにあいませぬ。——恨むらくは、都を立つ前に、すでに御出陣の機を逸していたことです。せめてお味方が、早くに、箱根、足柄を踏まえていた

らと」

「それに望みを失って、そちは帰って参ったのか」

「なんの、さほどなことで戦場をあとにいたしましたしょうや。立ち帰りました仔細は、こゝ早速に、五千の援軍をお繰り出し給わるか、さもなければ、令書をくだし、即刻、総勢をお引き揚げあるか、いずれかの策を、お採り上げ給わりたいがためにございます」
 「なに、五千の後詰をと。それや容易ではない。御軍勢を呼び返すなどは、なおさらできぬ沙汰よ。したが、まだ頼朝の兵も見ぬまに、なぜ、さまでさし迫った憂いを抱くか。憂うるところなれば、維盛、忠度の両将へ進言してなぜよい思案を立てぬのじゃ。……怪しいことではある。そのような軍議を扶けるため、両將軍に付してやったそなたではないか」

宗盛には、のみ込めない。

もつとも、これだけが、実盛のいわんとする全部ではなかった。

頼朝追討軍の失敗は、都を立たぬ前にあった。それは出陣の出おくれにある。また、上総守忠清の狭量による帷幕の違和も、それを決定づけていた。

だが、実盛は、忠清の言行については、何も触れなかった。

恨みがましい讒訴は一言もいわず、ただ平軍必敗の兆しは歴然であるとして、四つの難を、かぞえた。